

5-1 (8)

ルチーン検査データを用いた多発性骨髄腫の予後因子と層別化
(会長要望講演)

名倉英一

常滑市民病院内科

[目的] 現在、多くの腫瘍で予後因子により患者の層別化が提案され治療法選択の参考にされているのでルチーン検査データを用い本邦多発性骨髄腫症例の予後因子を解析し患者の層別化を検討した。

[方法] 1990年1月から2000年12月の間に日本骨髄腫研究会の17施設と1研究グループで経験した1380例の内、化学療法を施行した1,164例について治療前の患者の属性(年齢、性)、状態(PS、骨折の有無)、ルチーン検査(抹消血、生化学、骨髄)と臨床病期18因子を生存期間に関してgeneralized Wilcoxon test, log-rank testにより単変量解析を、その有意な因子についてCox regression modelにより多変量解析を行い検討した。また、多変量解析で有意な因子の数によりlow risk(LR)、intermediate risk(IR)、high risk(HR)の3群に分け層別化の検討を行った。[結果] 単変量解析で有意な因子は性、白血球数、Hb、血小板数、Ca、 2 MG 、creatinine、albumin、LDH、病期、PSの11因子であった。これらのデータが揃っている715例を通し番号の奇数(1群)偶数(2群)で2群化し1群で多変量解析により検討したところ、 $p<0.05$ で性別、 $p<0.01$ でHb・ 2 MG ・LDH・PSの5因子が有意となった。 $p<0.01$ で有意な4因子の因子数0をLR、1-2をIR、3-4をHRと層別化し、2群に当てはめてみると3群の症例数と生存期間中央値はLR(61例、4.8年) IR(184例、3.1年) HR(112例、1.6年)であった。[結論] 宿主、臓器障害、腫瘍の指標である4因子による層別化は有用と考えられる。